

ふるまひの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるまひの歴史・文化の再発見と創造を考える

第四十二号 (二〇〇九年十一月)

風に吹かれて (09 11) 白井啓治

『冬の声は聞こえたか いやまだ秋の声』

大阪の家を空襲で焼かれ、母の生家であった北海道に疎開してから高校を卒業するまで、雪のない地に暮らしたことがなかった。父の生家のある東京というのは春の雪解けの泥んこから逃げ出すための別荘地であった。だから大地から雪解けの水が引き、春の芽吹きの声が聞こえてきたら、空気の汚く喧騒な東京には用がなかった。夏休み、冬休みという長期の休みに東京に行こうなんて考えたことはなかった。

物心がつき、人間形成の大事な時期に雪国の山の中に過ごした事は、私に風の声に対話する喜びだとか、愉快さを教えてくれるに大いに役立ったと言える。

雑木林という言葉の中に、生きることの希望の風の流れている事を覚えてくれたのも、雪国の山に風との対話のある事を教えてもらったからであらうと思う。

風の声には、硬い冷たさと、柔らかな冷たさがある。明け方に窓打つ風の声を聞き冷たさを感じた時、「おや、もう冬になるのかい」と尋ねる様に布団から首を出す。すると肩口を冷たいけれども

だ柔らかさのある風が流れていく。それはまさに風が「まだ秋さ」と囁いてくれた声であった。寝覚めの時に、こんな風との対話が交わされた時、その日一日の希望を意識することが出来る。この風の囁く言葉には短絡も誤解もない純粹に希望だけがある。

こんな風に言うと、我が家はさぞかし隙間風だらけに思われるだろうが果たして、確かに隙間風の多い家ではある。しかし、風は吹きつける風ばかりではない。線香の煙が立ち上る時、空気をわずかに切り裂く波動のような風だってある。いざれにせよ風の声を聞くのは希望の声を聞くことだと思っている。

昨日の事であった。

石彫家の鶴見修作氏の「羅漢と吾流石展」が中志筑の長興寺に開かれていたので出かけて来た。そこに不思議な景(かげ)を見てしまった。

だいぶ前の事であるが草原に咲く花を見て、

『この花何だかみだらに女の隠しどころ』

という一行文を呟いた事があったのだったが、その感覚に似た石ころ達の景に出会ったのであった。景などと言ってみてもよく意味のわからない言葉であるが、私にはそれを景と表現するしかない。

盛り土の一角に土留めのように整然と石彫が密集して並べられてあった。大きなものではない。身長30センチに届かない程度の石顔達が殆どであった。ところが石達の顔が妙に艶めいて、みだらが感じられたのだった。

風雨にさらされて自然に創り上げられた景が、どんな塩梅に私に声をかけて来たのかは分からないが、微かなみだらをもって手招く風の景を囁いてくれたのだった。

そのことをどう鶴見氏に話そうか迷ったのであったが、

「不思議な感じで良い具合に枯れてきた一群にちよつと圧倒されました」

と伝え、その後をつなぐ彼の言葉を持った。

「あれは途中で彫るのを止めた石達なんです」

言葉を探しながら、彼はこたえた。

「そうですか。不思議な枯れ方をみせる景でした」

本音を隠した私を察知してかどうかは分からないが、はにかむような笑みを浮かべ、何時もの仕草である頭をかきむしるようにして、

「失敗したものの墓：のようなもの。土留めに置いたんです」

しかし、彼は変なものを見るなよ、とは言わなかった。表現者としての覚悟の一端がそこには確りとあった。もしかしたらあの石顔達は、一瞬の注意の空白という悪戯をうけただけで、鑿を打たれる前に芸術家の視線に裸にされたとき、自立して己の美を磨く意志が注入されていたのではないだろうか。それで隙だらけの私を通りかかったものだから、風がちよつとみだらを景を囁いたのではないだろうか。

昨年の五月(当会報第24号)より、「霞ヶ浦・常陸国風土記を歩く」会の皆さんへのガイドに同行してのご案内を紹介してまいりましたが、今回が最後となります。

南側に宮平遺跡(現在は常陸風土記の丘)を抱き、いにしえから人々の生活を守ってきました
①竜神山、そして竜神山に鎮座する②村上佐志能神社、③染谷佐志能神社をご紹介します。

①竜神山

石岡駅から、西方に約五キロ、標高一七九、九メートルの低い山ですが筑波山に連なる山で各所に巨岩が露出している。この巨岩は筑波山の東方に分布する古生層に属し、主に粘板岩から成り立っている。山には龍(男龍・女龍)が住み、雷神様が籠っており、雷様の穴に指を入れると、雷様が鳴らないうちは指が抜けないと言う伝えがある(染谷佐志能神社脇の風神の穴)。この龍は里の人によって龍神として厚く信仰されていました。山麓に湧出する清水は「日照りにも涸れることがない」と言われ、住民に喜ばれていた。旧石岡側からはなだらかなとも眺めのよい山であったという。

現在の竜神山は移ろう時の流れに翻弄され、無残にも真中が抉りとられながらも筑波山の男体、女体山に遅れじと必死な形相にその景観を保たせています。

②村上佐志能神社

旧石岡側から見て右側に鎮座しています。通称

柿岡街道の大砂交差点を少し過ぎ左に進んで行きます。

鎮座地、石岡市村上男龍下四九四。祭神・日本武尊、閻龍神(くらかみのかみ)、男龍。

「三代実録」に「仁和元年(八八五)九月七日戊子、授かるに常陸国従五位下、村上神に従五位上」とあることから、平安時代の頃の創建ではないかといわれている。

社殿はたびたび火災に遭いその都度再建、修復され、現在の社殿は一八八三年(明治十六年)に建て替えられた。社殿前、左手の「御神水」の石碑脇に竜門と君門の二穴がある。そこから清水が湧き出ていて、昔は村人の飲料水や灌漑用水に利用されたといわれている。龍神(男龍)といわれた雨の神、豊富な湧き水を司る神として尊敬された。

本殿、幣殿(現在はありません)、拜殿、鳥居一基、社務所を有し境内の総面積5,2 ha。祭祀は、毎年四月十九日に行われます。

③染谷佐志能神社

竜神山に向かつて左側。常陸風土記の丘から車で四〜五分のところに鎮座しています。

鎮座地、石岡市染谷峠一八五六。祭神、豊城入彦尊、高龍神(たかおかみのかみ)、雌龍。

承和四年(八三七)三月、仁明天皇の時、常陸国新治郡佐志能神社に預るとされる。

東国の鎮定に大功をたてた豊城入彦命(崇神天皇の子)の玄孫、荒田別命の子孫、佐白公が新治国造に任ぜられた時、祖神を鎮斎すべく龍神山の山中に神社を建てたといわれている(佐志能は左

白の転訛)。祭神である高龍神は村上佐志能神社の閻龍神と同胞であり、両部で龍神と称し雨の神である。

文久二年(一八六二)九月に社殿が炎上したがその後再興された。

本社左手にある屏風岩の穴は俗に「風神の穴」といい、夏になるとここより黒雲がまき起り雷神が出現し、雷雨を降らせて農民にとって干天に慈雨となるという伝説を生んでいる。毎年四月十九日の例祭に、十二座神楽という里神楽(古典民俗)が奉納される。約四百年の歴史を持つと伝えられ、市指定有形文化財となっている。

この十二座神楽は次のような順序で演出される。一猿田彦の舞、二長刀のつかい、三矢大臣、四剣の舞。以上は祓いの舞いと四方固め、一人で舞う。五豆まき(施肥のことか)(一人)、六狐の田うな

い(二人)、七種まき(一人)、八巫女舞(二人)、九鬼の餅まき(二人)、十みきの舞(二人)、十一えびすの舞(四人)、十二天の岩戸(八人以上)。楽器は、大太鼓、小太鼓、鼓、笛、鈴などを用い、演者はその場面に応じて、それぞれに扮装をこらし、仮面をかぶり無言で行う。

雨の神また田楽の舞といい、当時の主産業であった農業と密接な関係をもつものといえる。是非来年こそ里神楽、古典民俗に触れてみることをおすすめいたします。尚、四月十九日にお見過ごしの場合は、九月の「石岡のおまつり」、二日目の大祭に、常陸国総社宮の神楽殿にて奉納されます。

後継者不足で、十二の舞、すべて演じられないということですが、なかでも巫女舞(小学生二人)、鬼の餅まきは人気を集めています。

以上で歴史ガイドのご紹介は終了と致します。
長い間、紙面にお付き合い頂きありがとうございます。
皆様が「歴史の里いしおか」への御関心を深めて頂く一助になれば幸いです。

参考資料 石岡の歴史と文化

(石岡市歴史ボランティアの会編)

・ぐるっと 山の神さま

・里「灯る 烏瓜しずか」 (ちえい)

「閑居山磨崖仏秘話」の秘話

小林幸枝

十月十六日から十八日までことば座三周年記念公演及び第十六回公演を行いました。十六、十七日は、過去の公演の中から、私の好きな三つの作品を演じさせていただきました。中でも、菖蒲沢薬師古道と薬師堂をモチーフとした恋物語「緋桜怨節」は、一人芝居のような告白劇風の朗読舞劇で、石岡城中山の鈴ヶ池伝説をもとにした「鈴姫物語」とともに私の十八番ともいえる作品です。

三周年の記念として演じるので、私自身の精神的自伝として生きる事の意義について、怨節にのせて高ぶる感情を抑えながら劇しく(はげしく)演じてみました。自分では、納得のいく芝居が出来たと思っていますが、観て下さった方の評価は……?です。

十八日の第十六回公演では、常世の国の恋物語第二十二話として、閑居山磨崖仏秘話を、ことば座初の舞技の相方を迎えるの舞台でした。相方は、オーストラリアの原住民アボリジニの楽器ディジ

リドゥ奏者、禪侍高木崇光さん。高木さんは、 bodiesの磨崖仏を彫ったとされる「乗海」の役で、初めて手話に接し、さらにその手話を舞いにして演技表現するのですからさぞかし大変だったと思います。

公演には、聾啞者の仲間達が二十数名来てくれましたが、高木さんの手話演技にびっくり。幸枝さん短時間でどのようにして教えたの、と大変な褒め言葉を貰いました。何よりも嬉しかったのは、高木さんのディジリドゥとジェンベにあわせての舞に感動してもらえたことです。

私は舞歌にある「信じられるのは唯一美」の言葉に負けないように、またディジリドゥの心の大地の響きに一体となって舞うよう自分の精いっぱいスケールをイメージして舞いました。

その舞の心が、聾者の皆に、また健常者の皆さんに届いてくれたことは、俳優としてはその冥利に尽きます。

友人たちに、禪侍が、赤禪一つで心の声を演奏するよ、と言ったら、年寄りの禪姿なんて嫌だ、と言われたのですが、実際の高木さんを見た途端、まだ独身の若い美青年よ、とおばさん根性丸出しに女性軍は、大騒ぎで一緒に写真を撮っていました。高木さんが若い美青年だったこともあるけれど、このように障害者、健常者が一緒になって大騒ぎ出来たことは三周年の記念公演としては大成功であったと思います。

沖繩の友人達からは、ギター文化館だけではなく、色々な所で朗読舞公演をやれたら良いね、と応援のことばを貰いました。来年からは、ギター文化館での二カ月に一回の公演から年二回の公演になりますので、色々な所へ出掛けての公演もで

きるようになると思います。

自分達のふる里に生まれた、世界で一つしかない朗読舞という舞台表現をもっと多くの人に知って頂きたいし、私自身の表現スケールももっともっと大きく、美しいものに完成させていきたいと思っています。

演出の白井先生からは、四年、五年が本当の勝負になるからね、と言われていきます。朗読舞俳優小林幸枝をどうぞ応援くださいますようお願いいたします。

「頑張るぞ!!」

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...

また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい

自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、
連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
0299-55-4411

子供達が皆巣立ち、暮らしの始まりであった夫婦二人に再び戻って来た今、新しく終世への希望を紡いでいかなければならないのに、怨みがましい喪失感しか持てないのはどうしてなのだろうか。二人になっても話しをし、笑ったり怒ったりすることも子供等が居た頃と変わらないのであるが、感じ方が違う。戸を開け入り込んでくる風の流れ方や畳を焼く日差しもどこかしら弱々しく思えてくる。その所為か心の中が何時も刺々しく苛立ち、言わぬでもよい不満が口をついて出る。やはり家というのは夫婦を囲む家族が棲む所、場所なのだろうか。

そんなことを考えていたら、孫のマーちゃんが夏休みの一か月やって来るようになった。一人子供が居るとその家には複数人の子供が増えると言うが、当にその通りになった。近くに居る孫がやって来るようになる。そうすると従姉弟もやって来るようになり、さらには近所の子供達も集まってくるようになる。

沈殿していた空気が風となって流れ、喜怒哀楽の喧騒が家とその周辺を走り回る。人の暮らし、生活とはこんなに騒々しいものだったのかと改めて感心させられた。

一つの新しい人の暮らしが生まれると、そのまた新しい人が寄りついてくるのはマーちゃんに改めて教えられたのであったが、人の寄りつきも全く想像だにできないものもある。マーちゃんの帰る一週間程前の事であった。

友だちの力ちゃんに合う為に、夕方出かけたのであったが、その途中でシーちゃんに合ったのだ

った。まだ幼い子供だったときに遊んだ事があったが、それからもう十年以上経っており、すっかり娘らしく、大人の会話もできるようになっていた。

話をすると祖母の所へも父母の所へも帰ることができず、毎日友だちの所などを転々としているとのことであった。自転車に身の回り物の一式を積んでいるのだと言う。姿は小ざつぱりとしており表情も明るく見えたが、安らぐ場所のない不安の影を落としているのが解った。

夏の陽も傾き辺りは暗くなってきた。放っておくこともできず、取敢えず一緒にいらっしやいと力ちゃんの所へ連れて行った。

力ちゃんは留守で、マーちゃんは残念がったが仕方ない。シーちゃんを連れて家に戻った。

食事の支度の間、夫とシーちゃんは爺ちゃんと言った感じに話していた。マーちゃんは突然の訪問者・・・？ いやお泊り人の出現で大はしゃぎしている。

夕食後の花火は、一人増えたことで賑やかなものとなった。賑やかになった分、マーちゃんが両親の国に帰った時の火の消えた様子が思われた。

翌朝、シーちゃんはグッスリ寝込んでいたので夫に後を頼んでボランティアの作業に出かけた。

出かける前に、「夜は必ず帰っておいでね」と手紙を書いておいた。しかし、その晩は帰ってこなかった。裏切られたような気になったが確認をし合ったわけではないのだから、こっちの勝手な思いだけで裏切られたとは言えないのだと心に言い聞かせた。

もう来ないのかなと思ったら、次の日の夕方戻って来た。ほっとしながらその夜はシーちゃんの話

話を聞いてあげた。時々、声を荒げたくなり層にもなったが、まずは話を聞いてあげなければと好々爺いや婆を演じた。シーちゃんの話しを聞きながら、自分の子供の事を思い出してみた。こんなにゆっくりと対応してあげたことがあっただろうか。振り返って見たが思い当たらない。何時も何かの用をしながら、話を聞いてやり答えてやっていたりしていた。シーちゃんの話聞きながら、先ずはここに落ち着かせてやる事が一番だろうと心に決め、気長に付き合っていくと結論したのであった。

孫達と遊んでいるシーちゃんの様子は、まだまだあどけなさの残った少女そのものであった。

孫二人と墨で何かを描こうと始まった時の事、「保育園の時、これで書初めしたんだよ。その時ね、手が真っ黒になったんだよ」と話して聞かせていた。

三人は庭に咲いている向日葵を描いていた。そろそろ描き終わろうとした時、蠅が煩く三人の周りを飛び始めた。一人が蠅叩きで追いまわしはじめた。私はつい口を出してしまった。

「やれ打つな 蠅が手をやる足をする」
するとシーちゃんは、

「アッ、それ知ってる。俳句だよ。お姉ちゃんも書こう」

シーちゃんは俳句を書き、二人の子は花を仕上げた。

・夏風に 漂う香り 淡い恋
・花火から 灯されている 希望の灯
・元気な孫 足あげて 飛んでる姿

シーちゃんは、二人の子供に、「お姉ちゃんは本が好きなの。あなた達もたく

さん本を読んだ方がいいよ。お姉ちゃん、弟がいるんだよ。可愛いんだよ。早く働いて欲しいもの買ってやらなきゃ」

と話してやっている様子を見ると、自分なりに精いっぱい頑張りしようという心が伺える。何でもいい。ほんのちよつとのきつかけがあればこの子はまた元気に頑張っていけると思った。午後になり、シーちゃんが化粧を始めると二人の孫達は目を輝かせ覗きこんでいた。

「それ、とれるの？ 何で自分の瞳があるのにつけるの？」

「頭の毛は自分の毛なんでしょ？」

と興味津津に問いかけている。

「ナ　ちゃんにつけてよ」

「マーちゃんにもね」

と口紅をつけてもらいたいらしくおねだりをしている。

「じゃあ、薄くね。あんまり濃くつけると、人を喰った鬼みたいだからね」

理解したのか二人は笑っていた。その後もお姉ちゃん、お姉ちゃんと後をついて歩いていった。

孫達はシーちゃんから何を感じたのだろうか。

シーちゃんには幼い子供達をどう受け止めたのだろうか。それぞれに心の栄養になればと願う。

その後もシーちゃんは帰ってこない日があった。どうしようもない。私がああ娘にしてあげられるのは待ってあげる事だけだと心に言い聞かせた。

「お姉ちゃんは来るのかな？　お家に帰ったのかな？」

孫の心の中を思いながら

「そうだね」

としか言うつ術を持てなかった。孫は、何で家に

帰らないの、と聞く事はなかった。私達とのやりとりの中に何か感じとつたものがあつたのだろうか。

孫が国に帰る前日の夕食会にもとつと帰ってこなかった。合つことなく出発の朝を迎えた。準備が終わつた頃、電話が来た。マーちゃんは大喜びに受話器をとつた。

「タベのお別れ会に行けなくて御免ね。お姉ちゃんの事忘れないでね。首飾りあげるからね」

そんな話のようであつた。帽子の中に入れてある首飾りを私に見せてから、自分のリュックの底に大切そうに仕舞い込んだ。

マーちゃんは添乗員の女性に手をひかれタラップを上つていった。背中には首飾りをしまつたりユックが小さく踊っている。それは自国の飛行場に待つ父母に自慢する笑顔のようであつた。

シーちゃんには帰る所がなかった。暖かく迎えてくれる家庭に恵まれなかった。そうした状況を知つていた私は、十数年前親身になつてみてあげただろうか。親に助言をしてやつただろうか。思い出そうとしても断言できる記憶は明確にない。

過去の事はもういい。思い出してもそこに戻れるわけではない。シーちゃんに今してあげられる事をしてあげよう。体を病まぬうちに早くここに帰つておいで。孫はもういないけれど。

シーちゃんは夏が行つて、稲刈りの始まる頃に帰つて来た。今度は信用できる人に言えたとつ。その人の家族のところに行くのだとつ。私にその人の家の電話番号も教えてくれた。

その人は残業が終わつたら迎えに来るとつ。だからお握りを作つて持っていきたいけれど、作つたことがないのだとつ。好きな人の為に食事

を作る事は大切なことだと話し、準備してやつた。一生懸命に熱い飯を握つた。形を整える為何度も握り直していた。餅のようなお握りになるとつい口に出そうになつたが言つのを止めた。堅く握りすぎたと思つお握りを持つてシーちゃんは帰つていった。

しかし、長続きはしなかった。あれこれと話を聞いてあげたが、やはり強制的にでも家に一度返す方が良さだつと結論し、翌日家に送つていった。

しかし、これで良かったのだと考えるしかない。色々と心に引っかけりを持ちながら、いつしか自分と子供達の事を思い返していた。

仕事と家庭生活とを忙しく過ごす中で、子供達は淋しい思いや辛い思いをたくさんした事だろうと思う。しかし、今ここで過去を思い出してみたらとつ。過去が希望に変わる事はない。ふーと溜息を吐いて過去を消して、明日からが大仕事、と呟いてみた。

この夏は、幼い孫達と迷えるシーちゃんに合つて教えてもらった。安らぎの場所は、自分が造らなければ何処にも落ちてはいない。そんな当たり前を覚えてもらった。

夫婦二人きりになつて風が沈殿し、喪失感だけがドロンと横たわつているなどと嘆いていたのは、自分が窓を開け放たなかつただけ。そこに何人の人が住もつと、窓は開けないと風は吹きぬけないのだ。怠惰が風を沈殿させ、喪失感を作る。これからはため息が零れたら、直ぐに窓を開け放つ。風が流れた時、その場所は安らぎのある場所に戻る事が出来るのだから。

そつだ、明日はもう一度窓を開けよう。もしかしたらシーちゃんもここは安らぐなア、といつてごろんと陽だまりに寝転がりに来るかもしれない。

さくら

松山有里

私の師匠、寛さんが長年続けてきた谷津田には一本の見事な桜の老木が立っている。寛さんがはじめてそこを訪れた30年前の4月、その桜はきれいに咲いていて、こんな美しいところで田んぼをやりたいということでも借りて米を作りはじめたのだと聞いた。その場所からは遠く難台山が見渡せ、八郷が南北にまっすぐ見通せる。いつもそばには鳥の鳴き声、小川のせせらぎが聞こえ、本当に気持ちのよい風が吹いている。一枚一枚の田は小さく、形もばらばらで、何枚にも重なって段々と下へつながっている。小さな田から下のまた小さな田へ、水は滔々と流れ続ける。そこにいるだけで、体中の細胞がゆるんできて、気持ちよくなり、ずっとここにいたくなる、そんな場所である。よく寛さんは「働く環境は大切だ」と言う。たしかに同じ米を作るのでも、道路のすぐ脇で、だだっぴろく、真四角の田んぼは手仕事ではただ苦痛なだけだ。でもこの谷津田では一枚一枚は小さく、形も様々でしかもそれぞれに個性も強いので、ある部分たいへんかもしれないけれども、さきほどの環境という意味では最高である。今日は腰を痛めたTさんの稲刈りの応援ということで、本当に久しぶりにその谷津田で時間を過ごした。今は寛

さんは一部しかやらず、あとは若い人々が少しづつ分担して米を作っている。みんな天日干しでおだがけしている。下のほうから眺めるとそれもとでも風情があつてすばらしい。谷津田でこんなに人の出入りがあるのは今どきないだろうと思う。寛さんたちがこの30年、この田をつくつていなければ、とつくとつにこのすばらしい風景もセイタカアワダチソウと葛に覆われた荒地と化していただろうと思うと、この桜の老木も違つて見えてくる。

本で読んだことがあるが、「さくら」の「さ」というのは「田の神様」のこと、「くら」とは「よりしろ」という意味があるという。なので「さくら」とは「田んぼの神様が降りてくる目印」ということになる。なるほど、田んぼに桜が植えてあるとはやはり、豊穰を祈つてのことなのだ。いったい誰がいつそこに植えたのだろうか。想像が膨らむ。桜の寿命は60年ときいたことがあるが、60年前、半田に住むなかがしが植え、いったい何人の人々がその桜の花を楽しみ、夏の暑さをそこでしのいだか。若い男女の逢瀬の場所であつたかもしれない。戦争のときに出征する前の男が別れを言いに来て、無事帰ると密かに誓つたかもしれない。根元には石が祀られているが、荒れ果てて、そこへ何か花でも手向ける人はもう数十年いないような気配がある。大きな四角の石が倒れたままだなつていた。さくらも藤蔓や葛に巻きつかれて、息絶え絶えである。

Tさんの稲刈りが終わったあと、ふと桜にみんなが興味をもつた。石が倒れていることを伝えると、誰かが「これを起こそう」と言った。5人の男が力を合わせてなんと石は立ち上がり、桜の根

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末(最終土曜日)に勉強会を行っております。入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063 打田昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

元によりかかったのである。もつあたりは薄暗く、泥まみれで字はつきりとはしなかったが「虚空蔵尊」とあつた。田んぼの泥につぶして息絶え絶えであつた石もようやくもとの場所に戻り、再びあたりの風景を眺めることができるようになったのである。なにはともあれ、桜が喜んでいような気がした。今度の春にはまたこの桜を見に来よう。来年もたくさんお米がとれますように、年老いてもまだまだこの桜には活躍してもらわなければ。

人間の日頃の行動には、人類が太古の野生時代から培ってきた、臨機応変の判断を下す深層心理が、深く関わっていると思う。心理とまで言わなくとも、その場に感じた即刻の判断が、頭で考えるのではなく、自然と「身のこなし」として、反応することが多いのではないかと思う。

従って、高度の知的判断を要する場合でも、我々は、高々1万年そこそこの文明が築いた「経験則」ではなくて、何百万年も積んだ野生時代からの咄嗟(とっさ)の判断がまず先に出て、行動を決定するのではないかと考える。なぜなら、1万年やそこらで、DNAには、ほとんど変化はなく、動物的に生き抜く行動力は、殆ど変る事が無いし、例え、間違った判断でも、人類は同じ誤りを何遍でも繰り返す。

【1万年で、DNAに変化がないというのは、実は、小さな変化なら無数にある。(これがあるから、DNA鑑定ができる。)しかし、人類を大きく変換させるほどの大変化はなかったということである。今から700万年前、類人猿と枝分かれし、直立2足歩行を始めて、人類は誕生した。そして、幾多の化石人類を経て、今から十六万年前、最後の原人ホモ・エレクトウスから突然変異で、新人「ホモ・サピエンス」という我々の祖先が生まれた。その新人は、今から七万年前、僅か150人ほどの小集団で、アフリカを飛び出し、アラビア半島にしばらく定着。一部は再びアフリカに戻ったが、この150人が、現生人類67億人の祖先である。彼等は、遙かなる旅路を重ね、それぞれに世界の各地に進出したが、肌の色がどう変わ

ろつが、混血は可能で、どの組み合わせでも、子供ができる。ということ、DNAに大きな変化がなかったという証拠である。】

さて、過ちを繰り返す件だが、それが正に人間だ。文明社会で学習を重ね、幾度も災難など経験しているのなら、そして、知的生物として君臨しているのなら、同じ誤りを何度も繰り返すことはないはず。それが何度でも同じ過ちを繰り返すということは、一万年ぐらいの文明を積み重ねたぐらいで、「人類」は「神類」へと簡単には進化しないということだ。

人類は一万年ほど前、狩猟採集の生活から、定住をはじめ、世界で最も早く、植物を栽培し、動物を飼育し、定住を始めたのはメソポタミアあたりといわれる。その証拠は、イエネコのルーツを辿れば、よく分かる。ネコは、人類が初めてパートナーとして選んだ動物だ。オックスフォード大学のドリスコルらは、全世界のヤマネコとイエネコ979頭から、DNAを採取し鑑定した。その結果、ヤマネコは、世界で5つの系統に分かれるが、世界の全てのイエネコは、サウジアラビアに棲む「リビアヤマネコ」の子孫であることが分かった。考古学的にも、メソポタミア近辺の9500年前の成人の墓に、子猫が同時に埋葬されていた。9000年前のイスラエル、4000年前のパキスタン、3600年前のエジプトの墓から、人とともに、ネコの骨が発掘されている(日本では2000年前)。1万年前、人類は定住を始める。家の近くのゴミやネズミに、ヒトになつきやすいいリアヤマネコが寄ってきて、住民は飼いつつ、それが全世界にイエネコとして拡がったものと思われる。と報告されている。

さて、1万年の文明の歴史が、長いか短いかは、人により考えが違ふと思う。しかし私に言わせれば、人類誕生700万年の歴史から見たら、1万年は、瞬時にすぎない。現在、人間行動の残虐性やら、知的動物と言われながら、多くの不合理性は、1万年ぐらいの文明体験では、人間の根本行動を、高次の聖域に押し上げるなどは、所詮無理というもの。それゆえに、同じミスを何度でも繰り返す。

これまで私は、人類が犯してきた数々の犯罪・即ち母なる地球を荒廃させ、環境を破壊し、他の動物を滅ぼし、戦争など残虐行為の繰り返し。見るに見かねて、こんな人類を生み出した神様が悪い。万物創造の時、神様は粗製乱造するから、こんな粗野な人類がこの世に誕生したのだ。神様よ！反省しなさい……と噛みついてきた。しかし深く考えてみると、1万年そこそこの文明体験で、人類がそんなに高度に成長するわけがない。何百万年もの長い、長い野生の体験が、そう簡単に一掃され、高次の頭脳に置き換わり、神に近いような聖人君子に置き換わるはずなど、最初からなかったのだ。

アフリカで、最も腹を空かしている肉食獣はライオンだ。その狩の成功率は5%といわれる。まして、平爪で、犬歯まで退化している人類、おまけに五感の鈍化と来ては、いつも腹をすかし、食べ物奪い合い。悠久の野生の営み。ロマンなどあるはずがない。毎日が空腹との戦い。子孫は自ずと、エゴイスト。けんか。戦争に明け暮れる。これが人類だと考えれば、無理難題を押し付けた私が誤り。

それゆえ、現在の人間活動の不合理性を、やむ

を得ないと簡単に容認はできないが、人間の奥の潜在意識はいかんともしがたし。理屈ではなくその基本は、野生時代の習性が根本となっているのである。

故に、より完璧を求めて神に近づこうとか、己を捨てて滅私奉公などは、単なる選挙用の巧言で、実際、裏に回れば、即ち、人間の本性を丸出しにすれば、何百万年も積み重ねてきた野生そのものが、堂々と前に出てくる。

その現れの一つが、まず自分だけを護ろうとする「保身行為」だ。保身行為というと、公の立場の人間が、まず大多数の人々の生活や生命を守ることを最優先に考えるべきところを、それは後にして、まず自分達の組織が安全に生き延びられるような措置をとることに対する、非難的な言葉として聞こえる。しかし、長年の野生時代から、目の前に危険が迫ったら、己の身を守ることが、反射的な行動である。

良く例に出されるのが、国の場合、たとえ国家が減びても、我が省庁だけ生き延びればよい！とする官僚の不見識である。ペラボウな借金を残して、今、大きな批判を浴び、過去のムダを暴きだされようとしている。元をただせば、根には、大きな組織はともかく、最小の己の属する組織だけは、絶対に生き残ろうとする野生の本能なのかもしれない。

同じ過ちの繰り返しの典型は「戦争」である。小は、身辺の小競り合いから、戦国時代の国盗り合戦・そして最大は世界大戦に至るまで、多くの動物にみられる「縄張り争い」の延長線上の出来事と見ることが出来る。己の種族の生存をかけ、もっと、はつきり言えば、己のDNAのみは、何

が何でも生き延びて、子孫に確実に受け継がせていこうとする……これが生き物の本性なのである。己の安全のためには、邪魔になる他の種族・ライバルを徹底排除する。これぞ生き物の本性だ。

戦争は、砲弾や爆弾が飛び交うだけではない。近年、経済戦争などという、底意地の悪い、しかも相手に計り知れないダメージを与える、超恐ろしい戦争もある。特にその凶悪犯は、経済大国において、品格も道義もない、心の荒んだ地域に巣をくついている。ラテンアメリカのお人よしに比べたら、アングロアメリカの凶暴性はいつたいどこからきているのか？ 世界のだれが困ろうが、今の今おしさえよければそれでよし。自由経済とかいう野放しで、国家の統制が利かないシッチャカメツチャカの人道無視、原油や食糧価格を操作し、世界を狂乱の地獄へといざなう。

それどころかもっと恐ろしいのは、その経済大国に、はびこる凶悪モンスターだ。その名を「パテントトロール(特許の怪物)」という。薄型の液晶テレビなど、なんと、300件もの特許で占められているという。そのいくつかをこのモンスター共が買占め、製品が世に出たころ合意を見計らって、特許権の侵害とか言って提訴に踏み切る。莫大な賠償金とか和解金をせしめる。このトロールが、メーカーであるならば、互いに特許権の侵害とかで提訴し合い、双方引き分けという例もあるが、このモンスターは、メーカーではない。いわば、ペーパーカンパニーのようなもの。製造工場を、一つも持たず、特許権を振りかざし、頭脳ゲームのようにして世界を脅す。技術者は勿論、弁護士や計理士や心理学者などで、ガードを固め、一筋縄では落とせない「つわもの」だという。現

在、日本の名だたる電化製品メーカーは、この件で、四苦八苦。このような凶悪な野獣を野に放つ、経済大国は、一体、「国家の品格」など、どう考えているのだろうか？ オバマさんよ、ノーベル平和賞を得たのなら、まず核兵器を廃棄し、化石燃料大量消費国を脱却し、真の世界平和のため、巨悪のモンスターどもを、徹底的に、排除しておくれ！

さてこれまで、本会報でおなじみの打田先生によると、人類は洋の東西を問わず、幾多の戦乱に明け暮れてきた。王国の興亡、肉親同士の王権争い。下剋上。よくもこれだけ多くの戦いが尽きることなく延々と繰り返されたものと、ただただあきればかり。このよつな人類の歴史をみると、人類は根本的には、野生の動物から、何ら進化していない、闘争本能丸出しの弱肉強食につきる動物であるということなのである。

人間の本能に潜む残酷さ。途中で相手を許し、一定の線は越えないという紳士協定のようなものはないのか？ その点、動物のほうは優劣が決まり、一方が恭順の意を示せば、それ以上の攻撃はせず、無駄な争いは避ける。人間より、はるかに寛大で紳士的であるように私には見える。どちらが知的動物なのか、首をかしげたくなる。

とはいえ、植物は、無機物から有機物を生み出し、栄養を蓄える。それを動物は食べる。そして肉食の動物は、動物そのものをエサとする。いずれ動物は、他の命を奪うことにより、己の命を繋ぐこととなる。食うか食われるかは、生き物の本来の姿。いかなる聖人君子も、何かの命を奪って、己の命を生き延びる。

食前の『いただきます』は、食事を与えてくれ

た人に感謝するだけではなく、食べ物として、犠牲になり、人間に命をささげてくれた動物や植物に『長く生きたかったであろう、あなたの命を』いただきます。お許しください』という意味だ。とある人は言っている。私は、畜産に関係した仕事をしているので、同じ哺乳類でありながら、毎日人間という狡猾な動物により、無造作に命を奪われていく多くの家畜達に、済まない！許してくれ！という気持ちで一杯だ。

さて、人間はいかに立派なことを並べ立てても、所詮は自分の60兆個の各細胞に陣取り、生命現象をコントロールしている、「DNAの強い意志」により支配されている。何が何でも、わが子孫を残そうとする生命現象の表れが、あの弱肉強食現象なのである。DNAに意志があるかどうかは、わからないが、微生物から高等動物に至るまで、あれだけの強い食欲・性欲に支配され、自分だけは生き延びようとするあの態度を見れば、DNAというものは、ただの物質であるにも関わらず、「強烈な意志」を持っていると思えない。

これまで私は、人類は食糧や資源があるうが無かるうが、むやみやたらと子孫を残す。宇宙船地球号は超満員だ。と述べてきた。しかしその裏を返せば、DNAという物質は、何が何でも己のコピーを残そうとする強い意志の表れ。と考えれば、人類の知性も、単なるDNAの僕にすぎない。

生き物は、真にしたたかである。カッコウの卵は誰でも知っていることであるが、魚もそれをやる。アフリカのタンガニーカ湖のシクリッドフィッシュ(A)は天敵が多いので、我が卵や稚魚を護るため、自分の口の中で育てる。ところが、同様に棲むナマズの一種のシノドンティス・ムル

ティンククタートウス(B)という魚は、Aが自らの卵を口に吸い込む瞬間に、自分の受精卵も、一緒にAに吸い込まれる。するとBの卵の方が先に孵化し、Aの卵や遅れて孵化したAの稚魚を食べ、ある程度大きくなると仮親Aの保護を捨て、平然と立ち去っていくという。人間の世界にも、かなりの「悪」はいるが、自然界の「超悪」には恐れ入りました。

こと。己のDNAの命じるままに、弱肉強食で、他を押しつけても、まず自分は生き延びようとする根本姿勢に変わりはないということ。DNAが支配する人間の深層心理の例。原始人類のオス供が、女性を眺めた時、例えば大きなバストは母乳がたくさん出て、きつと子供を丈夫に育ててくれるに違いない。栄養も豊かだし、もしオレの子を産んでくれたら、子供にひもじい思いをさせず、未永く子孫を生き延びさせてくれるに相違ない。頭でそう考えるのではなく

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)(1000円)
菅原茂美第二作 「遙かなる旅路」(2) (定価: 500円)
伊東弓子作 「風のかげ」 (定価: 400円)

打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)
(二冊組: 1000円)
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価: 500円)

我がふるさとを“風のことば絵”という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!
ふるさと「風のことば」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を咬いたエッセイ集
兼平ちえこ 「風邪に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝 「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457
・いしおか補聴器: 0299-24-3881
にて販売しております。

ふるさと“風”の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)
電話 0299-24-2063

く、DNAが本能的に、そう考えるのであろう。

ついでに大きなヒップは、きつと安産が約束されることを、無意識のうちに、深層心理として働いているに違いない。そして、細いウエストは、この女性は、他のオスの子を、まだ宿していない。即ちオレを受け入れることが可能だと判断。懸命に食べ物を貢ぎ、口説き落とす。なにしろ、オスは恋の奴隷だ。美の奴隷だ。昔も今も変わらない。

「しかし、文明が進化すれば、人は姿・形だけではなく、「心の美しさ」に、一層、虜（とりこ）になる。芸術や宗教は、野生の昇華なのかも…。私の兄は、団扇に自作の川柳を墨書。その一首

*スイミング 鮎もいるけど トドもいる」

トドがいる一方、かつてイギリスやフランスの社交界で、御婦人方は一番下の肋骨を外科手術で除去してまで、ウエストを細く見せたのだという。

審美眼とは、頭で考えるのではなく、野生の本能の感性だ。美しいものに心惹かれるその理由。それは美しいものは、生存に有利と直感するからである。生存に不利に働くものに、心惹かれるわけがない。例えば、テニスのシャラポア選手の脚線美。あれは我々の先祖が野生時代、サヴァンナに立ち、獲物を探すにしろ、天敵を早期発見するにしろ、長い脚が絶対に有利であったに違いない。そのような脚線美の女性に、我が子を産んでもらえば、きつと子孫は、安全に生き延びるに違いない…とDNAは考える。

逆に女性からオスを見る目も同じこと。逞しい筋肉・敏捷な行動・確実に獲物を確保できる創意工夫。そういうものが備わっていれば、躊躇なく、身を任す。頭で考えるのではなく、野生の本能がそう直感するに違いない。そのようなオスの子な

ら、きつと生き延びられると野生の直感が働くのである。子孫が確実に生き延びられる配偶者争奪戦。それに命をかけるのは当然だ。野生の名残は、人間行動に深く沁みついている。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6

電話0299-24-3881

ふるさとの歴史・文化を知る朗読会

いしおか補聴器では、11月からふるさと歴史物語作家の打田昇三さんの作品を、ことば座の協力で、朗読に聞く会を毎月第2土曜日(19時~)開いていこうと考えております。ふるさとの歴史や伝承物語を、囲炉裏を囲むような形で、生の声に聞くことによって、自分達の住むふるさとの良さを、再認識することが出来るのではないかと考えております。

11月第一朗読会は「国分寺余話・仏教伝来」です。定員10名となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。朗読会料金(1,000円・・・コーヒーorお茶、お菓子付き)朗読後、ふるさと作家打田昇三さんを囲んでのお話し会があります。

ふるさとは次の世代に残さねばならない文化と希望の玉手箱

奈良県明日香村の文化財研究所でキトラ古墳から（保存修復のため）はぎ取った「白虎」の壁画片が一般公開されて大勢の見学者が押し掛けたが：書いた記者も観客も場違いの感じで全く感動出来なかつた という記事がデカデカと掲載された

新聞の切り抜きを持つている。この古墳は終末期に造られた極めて小規模の古墳らしいが、内部に方位を示す四神（青龍、白虎、朱雀、玄武）像や北斗七星、シリウス、牡牛座などの天文図が描かれていたため大騒ぎをされた。その白虎に黴（かび）が生えたので雀（むし）って直す時に公開し俄か（にわか）研究者が殺到したのである。

高松塚古墳などは、四神像の他に浮世絵師顔負けの美人画が描かれていたので、これも注目を浴びた。美人でも古くなれば黴が生えるから（失礼）いずれ化粧直して大騒ぎになるであろう。この二つの「古墳騒ぎ」で、私は日本人の美的感覚に感心する一方で「何か違つのではないか？」という思いがしてならないのである。古墳は見世物にあらず特に「場違いの感じ云々…」の記事を書いた

新聞の記者こそ場違いな人物ではないのか：はぎ取られた「白虎」は修復前の乾燥中なので本来は見学の対象でも無く感動などされては困る。高松塚の発掘に関わった遺跡（古墳）研究学者が「…古墳は古代人が眠る墓である。（自分の）遺骸を隠すことが願ひであるから…」と美術品漁りのようにいじり回す調査に注意を喚起されている。

「素人が生意気な！」と怒られるのを覚悟で言わせて貰えば、古墳で一番重要なのは「被葬者が誰かを確認すること」であろう。それを確かめる

ためには発掘が欠かせない矛盾もあるが、従来の古墳に対する（生きている）人々の関心は「大きさがどのくらい？」だとか「掘つたら何が出てくるか？」などに集中する。年始大売り出し恒例の「福袋」並みにお宝に期待したり、美術館と間違えて壁画などを見学し押し掛けたりするのは全くの見当違いではないのか、盗賊ならば別だが：

日本に存在する約二十万墓の古墳のうち石岡市には四十六位の「舟塚山古墳」がある。県内では一位、東国（関東、東北、甲信越）でも二位の規模とされているが、肝心の被葬者は応神朝の茨城国造（くにのみやつこ）筑紫刀禰に擬定されているだけで何も証拠が無い。霞が浦（古東京湾）の水運に関わった豪族の墳墓とする研究者の意見のほうに妥当性があるように思えてならない。何とか古墳の主を決める方法がないのであろうか：

誰かに齧られた石岡市唯一の山（龍神山）蛇神伝説の原点は大和三輪山（桜井市纏向）である。「日本書紀」の崇神紀に「三輪山の神である大物主神（おおものぬしのかみ）の妻となつた倭迹迹日百襲姫命（やまとととひもそひめのみこと）が夫の正体は蛇と知って悲嘆し壮絶でエロチックな死を遂げる」物語が書かれている。この寓話は眉唾であるが、三輪山は現在でも山自体を祭神とする酒造りの神でありシンボルの白蛇がいる。

三輪山の西に巻向（纏向）川を隔てて在るのが自殺した百襲姫命の墓とされる日本最古（規模では十一位）の「箸墓古墳」であり、冗談抜きで邪馬台国の卑弥呼の墓であるとか、後継者の吉与だとか、初代天皇（崇神）の墓であろうとか言われながら確定はされない。専門家は寓話に「三輪山は神の墓、箸墓は人の墓」として対比された意味

を推定している。「統治者でも、神にはなれない」ことを古代人が自覚していたのに明治維新から昭和二十年迄の日本は国家が神を悪用していた。

「埋葬者が分からない馬鹿デカイ墓地」が売りの古墳時代は突然に現れた。これを「文字の無かつた時代に於ける権威の誇示」とする意見もあるのだが、一部の巨大古墳はエジプトのピラミッド、秦の始皇帝陵に匹敵する世界的文化遺産と見做されているらしい。そうなると「我が国は古代史が正しく解明されていないので…」と古墳の被葬者を不明のまま置く訳にもいかないのでは：

実は古墳文化は日本独自のものではない。朝鮮半島から伝わって日本で発達したようでもあるが朝鮮が本場でもない。「ふるさと」風「」の前号（六の章）で触れたようにギリシアの奥地、野蛮国と言われてきたマケドニアには、田舎のオジさんが「なんぼでも在る」と自慢したように多数の古墳があり、その開始推定年代は日本の古墳時代より千年ぐらい早い。ただし巨大なものは無く形も戦時中に日本軍が戦闘機を隠した掩体壕（えんたいこう）のように半地下式であり、前方にギリシア神殿を配している。石積みで堀などは無いから見つけ次第に発掘調査が出来る。日本の様に頑迷で時代錯誤の宮内庁が邪魔をしたりしない。

マケドニア王国の首都とされていたエデッサとこちらが首都だと学者が主張したベルギナの他にも果物の産地レフカディアとかテサロニキ市近郊の工業団地シンドスなどに多数の古墳があった。長い間、見向きもされなかつたが、近年になって開発が進み古墳が壊され始めた。テサロニキ大学で調査を始めた彫刻や彩色壁画が現れて、古いにも関わらず黴も生えていなかった。

大英博物館、ルーブル美術館などに重要な出土品を持っていかれたギリシア国民は、田舎のマケドニア遺跡から壁画などが出て驚かず、誰も関心を寄せなかった。ところがベルギナ古墳から日本昔噺の「花咲爺さん」も「愛犬のポチ」も驚くほどの金製品が出土したのである。

ベルギナ古墳から出た金製品は大部分が埋葬者の骨箱や副葬品などである。一方で工業団地造成地からも仮面、首飾り、ペンダント、延板など大量の金製品が出土したから、ここで始めてギリシア国民がマケドニアに注目した。発見したアンドロニコス博士は、それらの出土品（と遺骨）が辺境の弱小国マケドニアを、一躍、ギリシア随一の強国にしたフィリポス二世のものと断定した。

誤解の無いように説明して置くとマケドニアに「金山」は無かった。それどころか広く古代ギリシア社会でも金が採れる場所は僅か一か所、アテネ市から南東へ二〇〇km近く離れたキクラデス諸島の小さな島（ギリシアの地図でも拡大鏡で見ないと分からない）シフノスに金山が在るだけで、大部分はトルコ（ギリシア植民都市）から輸入されていた。トルコの西部は金持ちの「金色燦たるクロイソス王」が居たように金の産地であった。しかしフィリポス二世は、シフノス金山や輸入に頼らず膨大な量の金を手に入れていたのである。

兵制改革などでマケドニア王国をギリシア最強の国家に仕上げたフィリポス二世が先ず侵略したのは黒海、マルマラ海、エーゲ海北部の沿岸地域に展開していたギリシア都市国家の植民地であり特にマケドニアとトラキアとの国境緩衝地帯にあったアテネの植民都市が真っ先に狙われた。エーゲ海に突き出た二本指のようなカルキディキ半島

の右付け根から少し上がった辺りにアンフィポリという小都市が現在も残っている。そこは奥地の森林から切り出された木材の輸出港であり都市国家アテネに莫大な利益をもたらしていた。フィリポス二世が率いるマケドニア軍はある日、突然にアンフィポリ市を取り囲んで威嚇した。

急報は主筋のアテネ市に伝わり、海軍でも陸軍でも直ちに救援軍が派遣されなければならぬのだが、アテネ市政府はこれを無視した。一つにはマケドニア軍の力を知らないから「アンフィポリ守備隊」が対抗し得ると思っており、別な理由はアテネ市が救援に出勤出来る状況では無かったからである。当時のアテネ市はペルシア軍襲来の際に登場したエウボイア島（五の章参照）と幾つかのトラブルを抱えて睨み合う状況であった。推察できる対立の原因は、どうも現代と良く似ていて「共同出資で買った株の暴落」か「食糧輸入に伴う値段の差」などであったらしい。都市国家同士の喧嘩だから規模は小さくても戦争につながる。

救援部隊がアテネならぬと知ったアンフィポリ市は仕方無くマケドニア軍を迎え入れた。実は七十年ほど前にも、この都市は一度、戦争でアテネ市からスパルタ市に奪われたことがあるから降伏の手続きは分かっている。こうしてアテネ市は海洋民族ギリシア人の暮らしを支える重要資材と木材取引の権益と北方植民都市の領土とを一夜にしてフィリポス二世に渡すこととなった。

天慶の乱の平将門は千人の兵で三千人が護る石岡の町を取り囲んだだけで常陸国を降伏させたがフィリポス二世もアンフィポリ市を囲むことで儲けたから、これに味を占めて周辺の都市国家植民都市を次々と囲み降伏させた。アテネ市がアンフ

イポリ市を見捨てた話が伝わり「マケドニア軍は強い」という噂が植民都市の抵抗を少なくして、トラキア沿岸部は征服されることになる。

かつて迷惑の上無いペルシアの侵入を撃退した頃のギリシア都市国家は、陸軍がスパルタ市、海軍はアテネ市がリーダーであった。外敵の心配が無くなり、今度は陸海の親分同士が喧嘩をして勝ったアテネは植民都市を増やし続けた。スパルタは「精強国家」の看板を下ろし、細々と暮らす弱小都市に成り下がった。代わって南部ギリシアのリーダーとなったのが、フィリポス二世を人質として保護していたテーベ市である。

六の章で触れたエバミノンダスが、アテネ市との戦いに敵は一万、味方は七千というハンデを作戦で乗り切り味方に勝利をもたらした。この將軍は哲学者が本業だったという。祖国の危機に自ら考案した戦法で臨み、敵を撃ち破った。この戦法は数の少ない味方の兵を斜めに布陣して効率を高めるもので、後に「エバミノンダスの斜戦術」としてローマ時代まで伝わる戦術の基本となった。

負けて元気が無くなったスパルタを押し退けるようにしてテーベ市が強くなったのはこの戦法のお蔭であり、エバミノンダスは更に戦法の実効を確かめるため紀元前三六〇年代に奥地のマケドニアまで進撃し一時的に占領した。六の章で展開したマケドニア王室の混乱收拾にテーベ市が介入したのは、その関わりからである。

マケドニア国王となったフィリポス二世も斜戦術を採用し、さらに戦鬪隊形の標準であったファランクス（槍軍団の密集隊形）の底を厚くしたり、槍を長くして強力な槍袞（やりぶすま）を完成させた。従来のファランクスは一角が倒されると総

崩れになる欠点があった。フィリポス二世はフランクス要員に「王の仲間」の称号を与え地位と名譽で倒されても崩れない槍の塊のような軍団を完成させマケドニアを軍事大国にした。

そのマケドニア軍が最初に占領したアンフィポリから海岸線を六、七十km東進した地点にカバラと言つ港湾都市がある。昔の名称をネアポリスと言ひ古代街道の要衝で、聖パウロがローマ目指して上陸した地点とされている。その關係で近辺には初期キリスト教關係の遺跡がやたらにあるのだが、この港は日本にも深い關係があつて、禁煙が進んだ現在はどうか知らないが「ハイライト」とか「マイルドセブン」などの原料は大部分が此処から旧・専売公社へ運ばれていた。

カバラはエーゲ海北部に面した港町ではあるがすぐ背後に山が迫っている。幾筋か南北に縦走する山脈の一つ、二千メートル級のパンガイオン山には「どこを掘つても金が出る」と言われた鉱脈があつたのだが、一部のトラキア人がそれを隠し通したと思われる。ギリシア本土へ侵入したペルシア軍は何度もカバラ付近を通過しており、また四の章で登場したトラキア駐留のペルシア軍司令官メガバゾスは銀鉱山のことについてダリウス大王に忠告しているから銀は見つかったとしても、金鉱は巧妙に隠蔽したようで、ペルシアがパンガイオンの金を手にした話は聞かない。

古代のギリシア人社会から疎外されていたトラキア人は、それを逆手にとつて「金山の秘密」を守つたらしく山麓、山腹、山の頂上付近に違つた部族がそれぞれを牽制しながら住み着き、余所者を近づけさせなかつた。彼らは野蠻で警戒心が強く、鉱山の神を信じていた。その中で「低い場所に住

む部族ほど人間味があつた」と書かれた史書があるが、当然と言えば当然のことで、その人々が集落を發展させてクレネデスという町をつくつた。

クレネデスの町（金鉱）は、経過は不明だが景気が悪くなる前のアテネ市に見つかり短期間であると思つが占領されていたらしい。殖民地政策と言つてあくどい商法で儲けていたアテネ市も一方では都市国家同士の争いに首を深く突っ込んでいたから、救援の手が回らないと木材の町アンフィポリのように出店を失うことになる。アテネからクレネデス（金鉱の町）を奪っていたのは直ぐ沖合に浮かぶ小さな島国のタソスである。奪つてはみたが管理が面倒なので、タソスは何かの縁でトラキア人でもマケドニア系に近いピエリア人に預けて金塊だけを受け取つていた。

金の産地トラキアに住んでいても金山の恩恵に浴することが出来ない部族は、何とかして金を手にいれようとパンガイオン山に近づく。ヘリコプターも無い時代だからまず山麓から狙うしかない。金が多く出るのは山麓のクレネデスである。フィリポス二世が木材の町を手に入れた頃、金（きん）が欲しいトラキア人がクレネデスの町に押し掛けてピエリア人を脅した。持ち主はタソス島であるから、そちらに助けを求めるときであるが無線も携帯電話も使わずに沖合いの島へ報告に行くのは敵に捕まる危険もあるし時間がかかる。

困つたピエリア人は、マケドニア国王のフィリポス二世が強国アテネからアンフィポリを奪つたニュースを思い出し、自分たちがマケドニア系に近い人種であることを伝手（つて）にマケドニア軍に救援を依頼した。その発想は良かったのだが頼んだ相手が悪かつた。盗賊から護つて貰うのに

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

芸術の秋のイベントもそろそろ終わり。
ギター文化館のコンサート・シリーズも残すところ一つとなりました。一寸気が早いけれど、来年も魅力いっぱいコンサート・シリーズになります。
御期待下さい。

12月6日 アンドレイ・パルフィヴィッチ・ギターリサイタル
ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎ 0299-46-2457
Fax 0299-46-2628

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。
営業時間 11:30~15:00
16:00~18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299-43-6888

強盗団の親分を選んだようなもので、フィリポス二世の率いるマケドニア軍はクレネデスの町を囲むトラキア人をつまみ出すと、そのまま居座った。そればかりか、配布された市報を見たクレネデス市民は自分たちの町が勝手に「フィリポス（フィリポス）」と変えられたことを知ったのである。

そうなるパンガイオン山の中腹や山頂にしがみついて金山を護っていたトラキア人の立場も決まってくるので、多量に産出する金は全てマケドニア王国のものとなり、王城がピカピカに飾られると共に軍備も飛躍的に強化された。フィリポス二世の軍事改革と相俟って、かつて「野蛮人」と馬鹿にされていたこの小さな田舎の国が、瞬く間に古代ギリシア世界のリーダーに押し上がった。紀元前三〇〇年代後半のことである。

複雑な家庭（国家）の事情からテーベ市の人質となり、成人後に隣国のイリュリに抑えられている祖国に戻って幼い国王の後見人を命じられながら、自分で国王の椅子に座ってしまったのがフィリポス二世である。イリュリ人を追い出した後にはテーベ市の干渉を受けたが、それも徐々に払い除けた。王国の力を伸ばそうとするのは当然ながらもう一つ、この若い国王を奮起させることがあった。それは熱烈な恋愛の末に結ばれた王妃との間に後継ぎの男子が生まれたからである。

さて飽きるほど続いた戦争の話から一転して若い男女の恋物語に移る訳だが「惚れた腫れた」は万国共通であり、冷静に考えれば珍しくも無いし、そういう場面の表現は個人的にも苦手なので簡単に状況証拠だけを述べて証言？を終わりたい。

大改装が行われる前のルーブル美術館には正面出入りに続く大きな階段の踊り場に、有名なギ

リシア彫刻「サモトラケのニケ」が置かれていた。ミロのビーナスと共に典型的なギリシア美術の傑作と称される有翼の女神像である。この像は名前のとおりサモトラケ島で見つかった。ニケは勝利の女神だそう、エーゲ海と地中海との接点にあるロードス島（国）民がシリアと戦って勝ったお礼にサモトラケ島へ奉納したのである。

サモトラケ島は、ロードス島から北々西の方角黒海へマルマラ海へヘレスポントス海峡を抜けてエーゲ海に入る行く手を塞ぐような場所にある島で年間を通して北風が吹きまわるといふ。その所為かどうが古代ギリシアでは密教の聖地とされており情緒不安定な大勢の信者がいた。

宗教は「悩める者の救済」が本旨であるうつけれども、自分自身が信じられない者に他人の考えを無条件で信仰させるのは実に無責任だと思つ：日本にも数十万の宗教団体があつて、どの教団も自分が正しいと主張する。しかし「善と悪」「因果応報」「終末思想」「天国と地獄」「最後の審判」など、大概の宗教が説いていることの基本は殆どゾロアスター（ギリシアへ攻め込んだペルシア帝国の宗教創始者）が考え出したことの受け売りである。教義ぐらいオリジナリティにしなければプロとは言えない：つまり大部分が？付きなのである。

マケドニア王国の居候に過ぎなかつたフィリポス青年は、自分の野心で国王の椅子を狙っていた頃にサモトラケ島へ頻りに通っていた。国家と一族に謀反を起こす訳だから良心の迷いも出るのである。島には同じ信仰に帰依する（狂信的な）男女が各地から集まっていた。その中からフィリポス君は一人の少女を見染めた。名は「オリンピアス」エピロス（エペイロス）国の王女である。

昔の章で触れたように「ギリシア神話の英雄・アキレスの子孫」と称するエピロス人は自尊心が強いバルカン半島最古の民である。何処から湧いてきたか分からないマケドニア人とは格が違う。居候で人質のフィリポス君が幾ら背伸びをしてもまとまる縁談では無かつた筈なのだが、そこは怪しい宗教の信者同士：多分、その頃にギリシアの覇者となつていたテーベ市の有力者が結婚させてくれたのだと私は思っている。結果的には婿殿がギリシアの出世頭となり、エピロス国としては損をしなかつたことにはなるのだが：

フィリポス王子は程なくマケドニア国の王位に就きエピロス王女オリンピアスが王妃となつた。結婚の翌年に当る紀元前三五六年の真夏、マケドニア王国宮殿に一人の王子が誕生した。その宮殿は六の章及びこの章で述べた首都アイガイ（エデッサ又はベルギナ）では無くエデッサ、ベルギナと三角形をつくる地点にある「ペラの宮殿」だとされている。金ピカ博物館のあるテサロニキからは西方へ約四十km、マケドニア平原の中央である。

ペラの遺跡が出現したのは第二次大戦後のことで農家のおじさんが庭先を掘って建物跡を見つけたのである。この宮殿跡は、怪物のように親族を肅清してマケドニア王家を奪ったアルケラオスが建てた宮殿と推定されている。フィリポス二世とは家系が違つたら「王が政務を見る王宮」とはならず言わば王家の別荘のような存在であった。

偶然だが、その王子が誕生した同じ日に聖地サモトラケ島から南東へ三百kmほど離れた小アジア（トルコ西部）の「エフェス市」に置かれたアルテミス神殿が炎上した。火災の原因は謎とされている。この神殿は世界七不思議の一つであり全身

に乳房を持つ奇怪な「豊穡の神（地母神とギリシア神が融合した神）の像」があつてギリシア世界では人々の尊敬を集める神域であつた。

エフェスは参の章で登場したデモケデス（ダリウス大王と正妃アトツサを治療した医師）が居たサモス島の対岸にあるイオニア系ギリシア殖民都市で、エーゲ海最大規模と言われた。アルテミス神殿のほか、世界最古と推定されるキリスト教会（遺跡）、ローマ時代二万五千人収容の円形劇場（二千年以上前の遊廓（海の男たちの一夜妻施設）跡と具体的な絵文字（ローマ字ができる前の）による遊廓案内の石彫などが残されている。

誰も本心から信じたとは思えないが「人々に信仰されていた聖なる神殿が謎の火災により瓦礫と化した日に生まれた」と言う単純な理由だけでマケドニア王室の赤ん坊は神の再来として扱われるようになった。「彼の裡（うち）にある一切が英雄の印（しるし）を帯びていた」と言うキャッチフレーズまで付いて：勿論、その話を創作したのはマケドニアの連中であるうけれども：神殿の焼失はアルテミス神がお産の加護にマケドニア出張中で消火が出来なかつた為と言つては、呆れながら「笑つて許して」と叫ぶほかは無い。

その日、父親のフィリポス二世は、ようやく仲間に入れさせて貰つたギリシア社会のオリンピア神殿競技（オリンピックの前身）で自分の馬が競馬に優勝した。そこへ王子誕生の知らせが飛び込んできた。彼は重なる喜びに浸つたと言われる。この話のほが余程、人間らしくて信じられる。この人騒がせな赤ん坊が、やがて世界に功罪半ばする名を残したアレキサンダー大王になる。

無責任な家臣が言つたのか、自分で言つたのか

分からないが、神の子を産んだオリンピアス王妃は全身全霊を注いでアレキサンダーを養育した。世界的に有名な割には容貌体躯についての情報が少ないアレキサンダーは、色白で柔和な目の少年だつたとされ、性格（余り良い性格ではなかつたようであるが：）は母親似、政治・軍事の才能は父親譲りであつたと伝えられている。

王国の期待を一身に背負われた少年には幼い頃から多くの家庭教師が付けられた。その中には国語、音楽、体育（乗馬を含む）などの専門教師も居たようで、特に王妃の遠縁に当る驎（しつけ）の殿しい人物と、格別の才能は無いがギリシア神話の世界に詳しく友人のような関係を築けた人物の二人が知られている。この調子の良い男が、アレキサンダー少年を「アキレス」と呼んでいた。オリンピアス妃の先祖とされる英雄の名である。狂信的な母親似の少年はその気になり易い。

アレキサンダー少年が十三歳に達した紀元前三四三年に、マケドニア生まれだがアテネの高名な哲学者であるアリストテレスが王室の家庭教師としてペラ宮殿に招かれた。フィリポス二世が自分の後継者を単にマケドニアの国王とするだけでは無く、ギリシア世界の覇者となるに必要な語学、弁論、科学、哲学など程度の高い教養を身に付けさせようと努力していた様子がうかがえる。アリストテレスの父親がフィリポス二世の父親（アミユンタス二世）の侍医だつた関係もあるらしい。

哲学者ソクラテスが死んだ：のでは無く、殺されたのは紀元前三九九年とされている。奥さんの名前が「クサンチッペ」逃げ出したくなるような名前の悪妻であつたと言われているけれども、本当は「教えるのが商売のような哲学者の夫が無報

酬で相手を啓発することに没頭していて家計のことを顧みなかつたことへの不満」から愚痴が多かつたのだそうで、気の毒な奥さんである。せめて名前だけでも爽やかであつたならば：余計な心配はさて置き「人間の知性」を説いたソクラテスを言論の罪で死刑にしたのが、民主主義を掲げたアテネの市民であつたのは何とも矛盾している。

著書を残さなかつたソクラテスの思想は高弟のプラトンに継承され「観念論哲学」の体系を生み出すことになつた。そしてプラトンの教えは弟子のアリストテレスに伝えられた。この三人は「古代ギリシアの三大哲学者」に挙げられる。ガリレオ・ガリレイらの宇宙観とは対立したらしいのだが：プラトンらが模索していたのは「ギリシアの衰退を防ぐにはポリス（都市国家）同士の抗争を中止して民族が一致団結するしかない：」悲願であつた。この願いは空しく、ペルシア帝国の策謀もありギリシア全土は戦乱に明け暮れる。やがてギリシア社会を統一するのは、皮肉にもギリシア人から「野蛮人」として疎外されていたマケドニア王国のフィリポス二世であり、その子・アレクサンドロス三世（アレキサンダー大王）である。

アリストテレスは、現代的に言えば高校から大学までのアレキサンダーを教育した。その授業内容は語学、数学、物理学、精神科学、医学、倫理学、動物学から政治学、文学、歴史学（世界史）などに及んでいたと推測されている。特にギリシア社会へ侵入した異国ペルシアの文化と祖国マケドニアのギリシア社会に置かれた地位についてはアレキサンダーが最も興味を惹いたと思われる。

教え子の大学卒業とマケドニア国皇太子への就職が内定した時点で、アリストテレス教授はペラ

王宮を去りギリシア学会に戻ろうとした。しかし皇太子の師という華々しい経歴も、偏見の強いギリシア人社会ではプラスにならず、アリストテレスはアテネ市の片隅に学習塾を開いて独自の教育を行っていた。アレキサンダー大王の死後、マケドニア人に抑圧されていたギリシア人は、「江戸の仇を長崎（を遙かに越えて）沖繩で討つ」ような卑劣な手段でアリストテレスに死刑を宣告した。曾師ソクラテスは同じ目に遭い、無智な連中に呆れて毒薬を呑んだが、アリストテレスは馬鹿に愛想を尽かしてアテネから逃亡し田舎（母親の実家）に隠れた。しかし程なく病死したようである。

世界的英雄を育成した人物にしては気の毒と言っしか無い。気の毒序でに触れて置くと、アリストテレスの甥は高級文官としてアレキサンダー大王の遠征に随行したのだが、思い上がった大王が自分を神格化して「跪拜（きはい）せよ！……つまり、ひざまずいて拝めと命じたのに従わず（神では無いから）処刑されているらしい。

さて今度は本物の神様の話になるのだが、ギリシア人に「聖地・大地のへそ」と考えられて畏敬されたデルフォイ神殿のことは五の章で述べた。火山性のガスを吸ってフラフラになった巫女さんが都市国家のお伺いに対して「戦争の勝敗」を告げる国家的な伝統行事が行われていた。神殿はキリスト教が普及した時代に破壊され（多分、商売仇として）現在は廃墟と化しているが、全盛時には山腹に壮大な施設が立ち並んでいたのである。

お互いに戦争をしていたギリシア都市国家ではあったが、デルフォイ神殿は占いが売りで、どの都市国家もお客さんになる。しかし、その管理運営については「聖地として最初に見つけ必要な設

備を設けた」都市国家などの代表が氏子会を構成してこれに当たっていた。氏子会は年次ごとに開かれており、その席では氏子の国々が神様の意向に背く行為をしていないかなど、チェックして賞罰や非難を行っていた。相互牽制で旨くいっていたのだが、長い間には氏子間の対立が起こる。

マケドニアのフィリポス二世が即位した年の氏子会では、デルフォイ神殿の地元である国のフォキスが神殿の領地を畑にして野菜などを栽培している（これは神への冒瀆になる）と非難された。

このフォキスという国は現在でも「県」になって残っているが人口は五万ぐらいで傾斜地にオリブを栽培している。神殿の在る場所は険しい山の頂上であり、周辺にも大声で「耕作地」と言うような場所は無いように思うのだが、ともかく氏子会の決定でフォキスに多額の罰金が科せられた。しかしフォキスはこれを無視して払わなかった。

氏子会は制裁措置として（これもどうかと思われるが……）全領土の没収を通知した。罰金も払わないのに国土全部を差し出す筈が無い。フォキス側はデルフォイ神殿を占拠し、氏子会に抵抗する構えを見せた。氏子会のボスはテーベ市である。フォキスを追い出せば聖地デルフォイを傘下に置けるので、この喧嘩に積極的であった。他の氏子

会加盟諸国を扇動して宣戦布告をさせた。これを「神聖戦争」と言うらしい。しかし戦争が神聖な筈は無く、またキリスト教社会のヨーロッパに似た様な名前の出来事があるから、こちらの方は余り知られておらず事典にも載っていない。古代ギリシアの片田舎で起こった小規模な戦争である。

フォキス軍と氏子会連合軍（主力はテーベ軍）はデルフォイ神殿域から少し離れた谷を主戦場と

して戦った。兵力に勝る連合軍はフォキス軍を簡単に撃破した。と言つ表現が当て嵌まるかどうか分からないが、何しろ勾配の急な峡谷が戦場であるから、多分、フォキス軍は敵の大部隊を見てさっさと逃げたのだと思つ。氏子会連合軍は神殿を確保出来たことで満足し、「大勝利」を宣した。

連合軍主力のテーベ市は、その頃、アテネ市及びスパルタ市と微妙な関係に有ったので、用心のために自国の兵を使わずフォキス征伐には高い金で雇った傭兵隊を差し向けていた。しかし戦争が簡単に終わって、その傭兵の雇用期間が殆ど手付かずの状態が残っていた。コンビニ業界のように勿体ないと思つたテーベ市は、その頃、反乱が起こりかけていたペルシア支配地のトルコにある住民都市へ傭兵を又貸してしまった。

最初の戦闘で逃げ足の早かつたフォキス軍は、兵力の損害もほとんど無く、山中に隠れていたが攻めてきた主力のテーベ軍が他へ出稼ぎに行ったのを知ると、勝手知つたデルフォイ神殿を再び占領し、今度は宝物を持ち出して金に換え強力な傭兵団を連れてきた。テーベ市は早まったのである。氏子会連合軍のもう一方の主力は、マケドニアに接するテッサリアの軍隊であつたが、これも単独でフォキス軍を攻める自信が無い。

フォキス側は前回の失敗を教訓にデルフォイ神殿に拘らず広範囲な防衛線を張ることにして、先ず要衝のテルモピュライを傭兵隊に占領させた。五の章で述べたように此処はスパルタの猛将レオニダス王がペルシアの大軍と戦つて壮烈な戦死を遂げた世界戦史に名高い場所である。百数十年前のテルモピュライ戦場にはフォキスも出陣している。父祖の名譽に賭けて今度は逃げないらしい。

敵軍が真面目に戦う様子なのでテーベとテッサリアは困った。氏子会連合軍だけでは勝てない。

「昨日の敵は今日の友」：当時のギリシアは正にその通りの状況であり、既に述べているが多くの都市国家が入り乱れて戦い和睦し、また離れてはくつ付き：を繰り返していた。神聖戦争もその一端に過ぎないのである。そして、戦争の主役は常にアテネ、スパルタ、テーベなどの軍事大国都市国家だった。ここで整理のために、ペルシア帝国がギリシア侵略を諦めてから平和な五十年が過ぎた後の概要をまとめておきたい——神聖戦争がどうなったかをお話しする前に：

ペルシア帝国のクセルクセス一世が陸海の大軍をギリシアに侵攻させアテネ市の神殿などは破壊したが各地で敗北したため、未練たらたら本国へ引き上げたのが紀元前四七九年である。

それから約五〇年間の平和が続いたけれども、ペルシアは資金をばらまいてギリシアの有力都市国家同士を争わせるように仕向けていた。

紀元前四七八年にはペルシアに備える名目でエーゲ海沿岸にあった約二百の都市国家が「デロス同盟」を結成した。提唱者はアテネ市である。

これに反発したのが陸軍強国のスパルタ市で、アテネの帝国化を恐れたのである。紀元前四三一年から同四〇四年まで「ペロポネソス戦争」が起こった。これはその期間中、真面目に？戦っていた訳では無く、スパルタ軍とデロス同盟の諸国軍が各地で断続的に喰い合っていたようである。結果としてアテネが負け「デロス同盟」は崩壊した。

スパルタ軍はアテネに進駐して戦争責任者や民衆主義者を処刑、追放し、三〇人のボスを配置してスパルタ式政治を行った。アテネから追放され

た人々は近隣の国に受け入れられた。そのうちに占領軍に対するレジスタンス運動が起こり、またスパルタでも権力の交代があり、話の分かる人物が出てきてアテネに民主制が許された。

紀元前三九五年から同三八五年にかけてスパルタを敵とする「コリント戦争」が起こった。これは強大化したスパルタに対する反発であり、背後にペルシアがいた。連合軍はコリントス、アテネ、テーベ、アルゴスの諸国であり、陸上ではスパルタの方が強かったが、海軍が大敗して海上権を失った。ギリシア人が海へ出られないのは死活問題で総合的にスパルタの負けとなる。この戦争の終結はペルシアの主導によるものであった。

紀元前三七七年、元気を回復したアテネは崩壊したデロス同盟に代わり「第二アテネ海上同盟」を組織した。そのうちに暗に「力の政策」を示し始めたアテネに反発が強まり、諸国は相次いで脱退を表明し、或いは抵抗したため、アテネは鎮圧などに追われることになる。こうして拡大し過ぎた殖民都市への影響力が弱まり、アテネが支配する辺境はマケドニアに荒らされるのである。その過程で小規模な戦争も起こったようである。「同盟市戦争」という名前だけが辛うじて残っている。

そして紀元前三五七年の神聖戦争に移るのだが氏子会主力のテーベ市とテッサリア市が「お家の事情」で攻めるに攻められない状態で困っているのに反して攻められるフォキス軍は、デルフォイ神殿を占領して膨大な量の宝物を抑えているからそれを叩き売れば幾らでも戦争資金は出来る。

対立が長引くと神殿の宝物庫がカラにされてしまふことを恐れるテーベとテッサリアが別々に思いついたのは、即位した「マケドニアのフィリポ

ス二世に頼む」という解決策である。特にテーベ市は少年時代から人質としてではあるがフィリポスを預かって嫁さんまで世話してやった縁があるから「恩を着せる訳では無いが」と言い訳をしながら神殿の取り返し（フォキスの始末）をマケドニア王国に依頼したのである。

服装を正した両国の使者がアイガイ宮殿を訪れ自分たちの不手際を隠すようにくどい言い回しで救援依頼の口上を述べた。フィリポス二世は両国から強引に「全てを任せる」と言わせてから救援を引き受け、使者が自分の国へ帰る前に精強な軍団を集結させてテルモピュライへ出陣した。

フォキスの傭兵は、敵であるテーベやテッサリアが攻めて来ないので少し退屈し油断していた。そこへ思いがけず背後のマケドニアから長い槍と厚い鎧で装備した大軍が密集隊形で攻め寄せてきたから慌てたり驚いたりする暇も無く潰された。フォキス側は傭兵隊を中心に、ほとんどの兵士が倒されて戦死者九千人と記録されている。

頼んだテーベとテッサリアはフィリポス二世の許へお礼の使者を送るよう手配したが、それは無用になった。救援軍は敵軍に代わってフォキス全土を占領し、そのままマケドニア領に組み入れてくれたからである。程なく北部トラキアの金山から木材集積所までがマケドニア領になる。

紀元前三五一年、インフルエンザのように広がる「マケドニア症候群」の被害が大きいアテネ市の指導者が、ギリシア社会を代表する形で「フィリポスを糾弾する演説」を行い同胞たる市（国）民が協力してマケドニアと戦いギリシアの自由を護ろうと呼び掛けた。しかし、それに応える国は無かった。その頃、フィリポス二世が体調を崩し

て少し静養していたから、大きな被害を受けたのはアテネだけだったのである。

紀元前三四九年、フィリポスは元氣になった。途端にアテネの同盟下にあった殖民都市がマケドニア軍に包囲された。アテネは二千の傭兵を送り込んだが役には立たず、さらに四千を送っても結果は同じであった。殖民都市は降伏した。ギリシア社会に見捨てられたアテネ市(国)はマケドニアと渋々、平和交渉をするしかなかった。

紀元前三四六年、両国に講和条約が結ばれた。しかし、その間にもマケドニア軍による北部トラキア方面への侵食は進んでいたものであり、アテネは「平和は犠牲を伴うものである」ことを知って泣きながら耐えていた。

紀元前三四〇年、フィリポスは黒海入口にあるビザンティオン(現在のイスタンブール)などを囲み、停泊中の船舶一七五隻を拿捕(たほ)した。これは食糧などを満載したアテネの船であり死活に関わる。アテネはテーベと組み、他の中小国も味方に付いてマケドニアに抵抗することにした。

こうして紀元前三三八年の秋には前の章(六)で紹介した「カイロネイアの戦い」が起き、マケドニア王国フィリポス二世が揃えたフアランクス三万の威力でギリシア連合軍を粉砕するのだが、この時に成人したアレキサンダーは二千の騎兵を率い初陣の参戦をしたと伝えられている。やがてこの若者が途方もない野望を抱き当時の世界帝国を樹立する。その故国は現地のオジさんが「なんぼでも在るぞ!」と威張った古墳に囲まれて何千年もの時を過ごし、とてもこの地が「偉大な征服者」を生んだ母国とは思えない。マケドニア地方は、それ程に穏やかと言うか古墳以

外には何の特色 もない平凡な山村なのである。

私の入院記(2) ギャク文化館代表木下明男

6月号に入院日記を掲載して頂いて、気がつけばもうすぐ半年になる。たまに、知らない人からも声を掛けられる。

「もう良いのですか…」

「エッ?」

「読みましたよ、風の会報を」

「エッ:ありがとうございます」

「続きはどうなりました?」

「はい、そのうちに」

と、こんなチグハグな会話がなされる。

ブログでは皆さまにこのように報告をしました。皆さまには、永らくご心配をおかけいたしました。実は、5月のコンクール前に定期健診で異常を指摘されていたが、忙しくて碌々病院にも行けぬ状況でした。コンクールが終わった時点で病院に行く、悪性腫瘍が見つかり直ちに切除をと言われてしまった。【体に害を与える悪いものが、いつのまにか取りついていた。その事を知らせる医者、大事ならぬ今の内に退治せよと言う。5月27日、体内の悪ものを退治するために、自らの体を傷つけ除去することを決意。午後2時に戦いの場へ乗り込む、格闘7時間、気がついたら午後9時、嫁さんと子供が心配そうにのぞきこんでいた。それでも、何とか生還出来たようだ。ただ、格闘の傷で全身苛まれている。体には5本の管が入っているので身動きできず。もう少し養生が必

要のようだ。】幸いに、全ての悪いものは除去できたので、術後の抗癌剤等の投与もなしひと安心。一週間かけて食事が普通食になった時点で、退院。それでも、今週一杯は休養が必要。徐々に体を慣らしたいと思っています。皆さまに、ご不便を掛けた事をお詫びします。もう少々、ご容赦ください。】

と。

前回この風の会報には、手術が終わってベッドに戻ってきた時まで書きました。その後、半年も経つと「のど元過ぎれば熱さを忘れ」ではないが、記憶が薄れてしまうものです。今回は、入院記2として覚えている事だけを書き留めたいと思います。

Ⅱ 幻覚と夢Ⅱ

私は今まで、幻覚を感じた事(体験したこと)はない。それが、手術後1・2日の間、その幻覚を見た気がする。TVを見ていたり、横になって考えていたりすると、自分の考えている事とは違、映像や囁きが突然見えたり、聞こえたりしてくる。具体的にどんなことかは思い出せないが、明らかに違う世界に入っていくようで慌てて現実に戻ろうと意識が湧いてきて、そのはざ間で混乱している自分を意識する。まるで、起きているのに(当然昼間である)夢を見た後の様な感覚。また、夜に見る夢も普段とは明らかに変わっていました。同じ夢を2日間も3日間もみます。シュチエーションが同じで、まるで続きの夢を見ているようでした。金縛り状態も何回か経験しました。意識は攪拌しているのに、手足体が全く動かない、声も出ない、そして自分の唸り声で体の自由が取り戻

せるのです。

手術後は、全く胃から水分以外は入らないのに何故かすごく元気でした。手術の翌日から体を動かせとの医者の指示の下に、点滴の台を転がしながら飛ぶように看護室の周りを歩き回っていました。一日に500mlのブドウ糖を5本点滴していました。

6月2日(火)手術が終わって1週間、やっと持ち込んだパソコンのキーが打てるようになった。現在はまだ、口から入る食事はなし。数日前から、やっと水分OKの許可が下りたばっか、現在は点滴が(ブドウ糖)1日5本、痛み止めが(背中)の脊椎につないで自動的に入る(良く効く)1日1筒分、他にわき腹に穴が開けられ、内臓に貯まった血液等を排出されるドレーンと言われる装置。実は、昨夜から痛さのため一睡も出来ていない。痛み止めを注入したばかりの時は良く効いて、ほとんど気にならない。しかし、切れ掛って来ると、その痛みが徐々に肉体を犯し眠れる状態では無い。私の現在の、1日の日課は病棟の中心に有るナース室を最低10周の、お散歩。後は、特にやる事なし、したがってテレビを見るか本を読む(それも、最近やっとその気になった)だけ。試しに体重を計って見るとなんと83.5kg、10キロ近く減。また、体を拭いて貰い頭を洗って貰った。サッパリし、幸せな気分です。

主治医の一人笹屋医師(手術の説明をしてくれた)の回診があり、大分順調に回復をしているので今日の夜から、重湯にしようと言いくつつかの条件を告げナースに指示をした。この日も、痛み止めが効いてから、読書、TV、記録等諸々の作

業に対する意欲が湧いてくる。医師も言っていたように、順調な回復との事、この分だと退院も早いだろう。

早速夕飯から、流動食ではあるが口から食べ物が入った。実に一週間ぶりの食事、人の欲の中心は食べることだと言う実感を感じるとともに、煩わしいと云う気もする。何故なら、食べないで生き続ける事が出来ればそれが一番いいような気がするからだ。また、この様に人間痛みには弱いものかと言う事を実感する。ちよつとした不快感(痛痒、悪感、倦怠等々全て)があるだけで、意欲が失われてくるからだ。これだけ持ってきた、DVD、CDも全く聴いていない。ただ、読書だけは気晴らしに一番良いと感じた。

久しぶりの夕食後、痛みもなく愉快な感覚で過ごすことが出来たが、22時頃から痛み止めが切れてきて、楽しみにしていた睡眠は、またも苦痛の中だった。それでも、2回位睡眠に入れたようだった。

6月3日(水)、手術からちょうど1週間、傷の疼痛の中で目覚め。血糖値も朝は119と丁度よく点滴もなく快調。朝、2度目の食事、食事後直ぐに点滴、今度は(ブドウ糖では無い)。どちらのせい(食事・点滴)判らないが血糖値がまた上がる。

(199)藤原医師の回診で、ドレーンを外し、胸の傷の抜糸(実はホツキスを外した)体についている異物が次々と取り除かれる。実に気分の良いものだ、脊椎の痛み止め注入用管も外すと言われたが、昨夜からの痛みを訴え、もう一日待つことにした。今日こそ睡眠を楽しみたいものだ。嫁さんに鬚剃りを買って来て貰い一週間ぶりに鬚を剃る。サッパリついでに下着・パジャマの上下

を交換、管が取れたせいか着替えが大分楽になった。

この頃になると、日を追って体の回復は早まる。術後の諸検査も入り、食事も流動食から、お粥や固形物へと変化をしてゆく。段々体調が戻って来ると現金なもので、食欲も増してくるが、そう簡単には量は増やして貰えない。ただ、運動をしないせいか、ガスや便の出がスムーズでなく、トイレにいる時間がやたらと長い。外出許可が下りると、やる事が無いので、外出などもするようになる。もうすぐ退院、もうギター文化館に戻って、溜まった仕事をどう始末するか、そんな事を考え始める。退院せず、もつとゆつくりしたい気持ちもあるが、そうもいきまい。

現在、術後半年経ち経過良好、ご心配かけました。お見舞い本当にありがとうございました。

編集後記

風の会、ことば座の3周年記念展及び公演も無事終了しました。本当は、3年間の総括などを書かなくてはと思いつながら、ちよつと一服しているうちに、時間がなくなってしまう。総括は区切りの良い来月号にと勝手に決めてしました。新型インフルエンザが身近にやってきました。みなさんご注意ください。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

URL: <http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ギター文化館発ことば座第17回定期公演

常世の国の恋物語第23話 「天狗の舞」

12月20日(日曜日)午後1時半開場：2時開演

目を開けたら、私の希望と幸せが目の前に広がって見わたすことができました。

昔々、竹原郷の園部川近くに「トキさん」というお婆さんが住んでおった。
トキさんは、悲しんでいる人がいるとその家に出かけて行って不思議な舞をまって、
悲しんでいる人を元気付けたんだと。
トキさんはその不思議な舞のことを天狗舞と言っておったそうじゃ。

ことば座第17回定期公演「常世の国の恋物語」第23話は、愛宕山の13天狗と愛宕山から見渡した常世の国の風景をモチーフに書き下ろした「天狗の舞」をお届けします。

「動くな！」お父(とう)は、大声でそう怒鳴るとトキを抱える様にして包み込んだ。しかし、お父はトキを抱きかかえたまま起き上がる事はなかった。その時から、トキは足を動かそうとしても動かなくなってしまった。トキの足を直してくれたのは、愛宕山の13番目の天狗になるはずだった、大鷹坊という山伏だったという。

脚本：演出 白井 啓治	朗 読 しらみひろぢ
舞台背景画 兼平ちえこ	朗読舞 小林 幸枝
舞台美装 小林 一男	

入場料 3,000 円 (小学生 1,500 円 : 中学生 2,000) 前売券 2,500 円

前売券は、ギター文化館 (0299-26-2457) いしおか補聴器 (0299-24-3881) にて取り扱っております

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35 ☎ (0299-24-2063) Fax (0299-23-0150)

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする教室「風の塾」を開いています。(各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円)

絵と一行文教室 (講師：兼平ちえこ 白井啓治) エッセイ教室 (講師：白井啓治)

詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師：小林幸枝 白井啓治) 朗読教室 (講師：白井啓治)

入塾および教室の詳細は、「ことば座事務局」(担当：白井)電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。

ことば座俳優塾、研究生募集中!!

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優志望者(若干名)を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂きます。

研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

研修料月額30,000円。(入塾には簡単な適性審査があります)詳しくは、上記ことば座事務局までお問い合わせください。